

<学生のコメント>

§4 「共通知識」と「共有知」(続き)

2、認識論的独我論と存在論的複数自我論は両立不可能である(再説)

- ・全ての志向性が個人の心の中にあるのだとすると、我々は、集团的志向性を、個人的志向性に還元して説明しなければならない。
- ・もし全ての志向性が個人の心の中にあるのだとすると、この考え自体もまた、ある個人の心の中にあるのである。
- ・ひとは、自分と同じように考えている心が複数あると想定することが出来るが、しかし、その想定もまた彼の心の中の志向性にすぎない。
- ・つまり、全ての志向性が個人の志向性だとすると、つねに独我論に舞い戻ってしまい、志向性を持った諸個人が存在するという想定、つまり個人的志向性から集团的志向性を構成すること自体が、個人の想定になってしまう。
- ・以上の議論が正しければ、<全ての志向性は個人の志向性であるから、個人的志向性から集团的志向性を構成する>という主張は、自己論駁的である。

- ・では、どのようにして我々は複数の自我の存在を想定したり、知ったり、主張したりできるのだろうか。
- ・もしその想定や知や主張が個人によって行われるのだとすると、我々はまた認識論的な独我論に舞い戻ってしまのだから、これを避けるには、<その想定や知や主張は、個人によって行われるのではなくて、個人を超えたものである>と考えるしかない。

3、対象の共有と記述の共有(再説)

(1) 我々は同一の花瓶を見ているのか?

- ・我々は、知覚を他者と共有することは出来ないだろう。
- ・しかし、我々は同一の花瓶を見ている。
- ・我々が、「我々は同一の花瓶を見ている」と考えることはいかにして可能なのだろうか。
- ・この考えの発生をどう説明するのか?(これよりも重要なのは次の問いである。)
- ・この考えの保持はどのようにして正当化されるのか?
- ・それは、私たちが同意することによって正当化される。
なぜなら、もしaがこの同意を期待していたのに、bが「私が見ているのは花瓶ではなくて机です」とか「私には机の上に何も見えません」などと言って、同意が得られなかったならば、aは、bが同一の花瓶を知覚していることを疑い始めるだろう。
- ・したがって、知覚対象の共有は、言語による世界記述の共有を必要条件として前提している。

(2) 言語による世界記述の共有は、どのようにして可能になるのか?

- ・予想される一つの答えは、<一つの花瓶を複数の人が知覚するように、一つの命題を複数の人が理解する>という答えである。

例えば、フレーゲは命題の意味としての思想が客観的に存在すると考えていた。

・しかし、このように考えても問題は解決しない。例えば、「 $5 + 7 = 12$ 」を a と b が理解するとき、フレーゲならば、a と b は共に客観的に存在する一つの思想を考えていると言うだろう。

・しかしその場合、

・ a と b はその客観的な思想にどのようにしてアクセスするのか？

・何か神秘的なアクセスが可能だとして、a や b がその客観的な思想を正しく理解していることは、どのようにして保証されるのだろうか？

・ a は、b もまた自分と同じようにその客観的な思想を正しく理解していることをどうやって知ることが出来るのだろうか。

・その命題について、a と b が議論することによって、命題の意味の理解が一致していることを確認することによるしかないだろう。

・このように考えるとき、合意が成立すればよいので、客観的な一つの思想が実在していると考えする必要はない。

・しかし、もし知の担い手が個人であるとする、a と b の理解の一致は、a あるいは b あるいは両方の、個人的な想定に過ぎないことになるだろう。

・もし我々が言語による世界記述を共有していると確実に言えるのだとすれば、我々は知のあり様を別様に考えなければならない。a と b がある知を共有するといえるためには、a と b が共にその一つの知を知るのだからなければならない。これは確かにこれまでの認識論の常識に反する主張である。

■ 知の存在が、知られていることではないとすると、
知の存在は、脳の作用に付随する。

■ 共有知と個人知は形式が異なる。

この二つがどう関係するのか。

共有知についてのメタ個人知がありうる。

§ 5 人格の同一性

< A さんがお金に困って包丁で B さんを刺して殺し、お金を奪いました。その後 A さんは捕まって裁判にかけられました。裁判官は、A さんを有罪にしました。 > この時、裁判官は次のことを前提しています。

・ A さんが包丁で B さんを殺したことが原因となって、B さんが死んだという因果関係がある。

・ A さんが B さんを殺したという過去の出来事が実在する。

・ A さんの意志は自由であり、A さんは自分の行為に責任がある。

・ 強盗殺人した A さんと裁判にかけられている A さんが同一人物である。

問い「強盗殺人した A さんと、裁判にかけられている A さんが同一人物であるとはどういうことでしょうか」

答え 1：人格の同一性を構成するのは、身体の同一性だろう。

反論：物質的には同一ではありません。

身体の形態は似ているかもしれませんが、かなり変化しているかもしれません。

応答：それでも身体の変化の連続性が身体の同一性を保証するだろう。

反論：身体の変化の連続性を保証するのは何か？

答え2：人格の同一性を構成するのは、心の同一性だろう。

反論：性格は似ているかもしれませんが、銀行強盗した時のAさんの性格と似ている性格の人は他にもいるかもしれません。

反論：心的内容は同一ではない。

応答：心的内容の変化の連続性が心の同一性を保証するだろう。

反論：心的内容の変化の連続性を保証するのは何か？

答え3：人格の同一性を構成するのは、身体と心の結合体の同一性だろう。

しかしこれが同一であるとはどういうことだろうか。

身体や心の変化の連続性であろうか。

反論：もし身体や心の変化が連続的であるとしても、そのことを記憶していない人がいるとすると、その人は人格だといえないのではないか。

記憶が一日しか保持できない人がいて、朝目覚めるたびにそれまでの記憶を失っているとしよう。

彼女が10日前に銀行強盗したとして、我々は彼女を裁くことができるのだろうか。

答え4：人格の同一性を構成するのは、＜身体や心の変化の連続性＋その記憶＞、であろう。

反論：記憶は身体や心の変化の連続性を保証できない。

「時刻T2における人物P2が、それ以前の時刻T1における人物P1に起こった意識経験を覚えているとき、そしてそのときに限り、時刻T2における人物P2は時刻T1における人物P1と同一である。」(サールの『マインド』山本貴光・吉川浩満訳(朝日出版)の「第11章 自己」から引用したい。p. 365)

サールはこれが循環しているという。

「時刻T2におけるP2が時刻T1におけるP1に起こった出来事を本当に覚えているためには、単にその人がそれを覚えていると考えるのではなく、P2はP1と同一でなければならない。」しかし、P2とP1の同一性を言うために、記憶の連続性を主張しようとしているのだから、論点先取の循環になっている。(ちなみにエイヤー『哲学の中心問題』竹尾治一郎訳、法政大学出版社、p.183にも似た議論がある。)

これを次のように批判することも出来るだろう。

「時刻T2におけるP2が時刻T1におけるP1に起こった出来事を本当に覚えているためには、単にその人がそれを覚えていると信じるだけでなく、その信念が真でなければならない。」

しかし、記憶についての信念が真であることを、記憶によって記憶では保証することはできない。それができるのは、他者の記憶である。

答え5：人格の同一性を構成するのは、＜身体や心の変化の連続性＋それについての複数の人間の同意＞である。

人格の同一性が成り立つためには、身体や心の変化の連続性だけでなく、それについての知識が必要である。それについての知識が成り立つためには、それが私的な信念ではなく、公共性を持たなければならない。

■残された問題：「複製の問題」

「心が複製されたときに、どちらを人格とみなすのか、あるいは、人格の枝分かれを認めるのか」という問題

●「Ship of Theseus テセウスの船」Wikipediaより

プルタルコスには以下のようなギリシャの伝説を挙げている。

「テセウスがアテネの若者と共にクレタ島から帰還した船がある。アテネの人々はこれを後々の時代にも保存していた。このため、朽ちた木材は徐々に新たな木材に置き換えられていき、やがて元の木材はすっかり無くなってしまった。

テセウスの船は哲学者らにとって恰好の議論の的となった。すなわち、ある者はその船はもはや同じものとは言えないとし、別の者はまだ同じものだと主張したのである。」

テセウスの船を作っている板を一枚とって、別の木の板と取り換えたとします。それでもそれはテセウスの船です。2枚の板を取り換えても、それはテセウスの船です。全ての板を取り換えた時はどうでしょうか。それでもそれはテセウスの船だということができるかもしれません。では、もとの船から取り外した板を使って、テセウスの船を作った時には、どちらがテセウスの船でしょうか。

これはソリテス・パラドクスに似ている。

●「ソリテス・パラドクス」 wikipedia より

砂山のパラドクス (すなやまのパラドクス、[英](#): paradox of the heap) は、[述語の曖昧性](#)から生じる[パラドクス](#)の一種である。ソリテス・パラドクス (Sorites paradox) とも呼ばれ、sorites は[ギリシア語](#)の σωρός (sōros、堆積物) の形容詞化した言葉である (σωριτής (sōritēs))。簡単に言えば、[砂](#)の山があったとき、そこから数粒の砂を取り去っても砂山のままだが、そうやって粒を取り去っていったとき、最終的に一粒だけ残った状態でも「砂山」と言えるか、という問題である。砂山のパラドクスの起源は、一般に古代ギリシャの哲学者ミレトスの[エウブリデス](#)が作ったとされるハゲ頭のパラドクス (Paradox of the Bald Man) に帰せられる。

ハゲ頭のパラドクス [\[編集\]](#)

「髪の毛が一本もない人はハゲである」(前提1)

「ハゲの人に髪の毛を一本足してもハゲである」(前提2)

ここで前提1 に前提2 を繰り返し適用していく。そして次の結論を得る。

「よって全ての人はハゲである」(結論)